



# 『まっすぐな地平線』大賞

## 心のコミュニケーション

4年 F・ーさん

平成三十二年度から、日本の小学校では外国語教育が始まるそうで、わたしの通う浦安市の小学校でも先行してすでに外国語の授業が始まっている。まだ五才の弟でさえも、保育園で英語の時間があり、

「イツサニー、イツレイニー。」

と天気を告げてくる。両親も先生も、これからは国際化、グローバル化、外国語でのコミュニケーション能力を身に付けることが必要だ、と言っているし、しょう来外国語を話すことができれば、世界中を飛び回りいるいるな国の人と交流できるのだらうとなんとなく思っていた。

でも、悠介とミンミンは日本語を用いて言葉は通じているのに、おたがいの心はなかなか通じ合わない。それどころか、悠介と母、父と母は、同じ日本人なのにすれちがい、分かり合えていない。ミンミンはそのことに気付き、問題解決にはおたがいを「理解」すること「尊重」することが必要で、そのためには人と人が心を通わせないといけないのだ、と口をつたえらる。

先日、友達の下君家族にホームパーティーにまねかれた。パーティーといえば母のからあげ、と決まっているので、楽しみにしていたのに、母は野菜を使った太巻を作っていた。

「えっ、なんで、からあげじゃないの。」  
とがっかりして聞くと、

「下君一家はベジタリアンだからね。今日はわが家も野菜料理を作っていくのよ。」と返ってきた。下君家族はベジタリアンで、肉、魚は食べない。母はいつも、「お肉やお魚でタンパク質をしっかりとりたい。」

と言っているのに、当然ベジタリアンの人たちの考えに対して、肉や魚を食べないと成長に良くない、と反論すると思っていた。しかしわたしのぎ間に母は、

「世の中にはいろんな考えの人がいるの。自分の考えだけが正しいわけじゃないし、人の意見から学ぶこともあるのよ。でもママはお肉やお魚が必要だと思っから、うちの食事にはほとんど出さからね。」

と答えてくれた。そのときは不思議だったけれど、この母の行動は相手への「理解」の一つだったのだと気付いた。肉、魚は必要だという自分の考えを相手におしつけるのではなく、家にまねいてくれた下君家族の価値観によりそうことで、心でコミュニケーションをとろうとしたのだ。

人間は一人一人みんなちがう。親や兄弟でも、だ。年齢や性別や国せきが異なれば、ちがいはさらに大きくなる。そんな自分以外の多くの人たちと関わり、助けられ、協力し合いながらわたしは生きている。おたがいがおたがいを「理解」し、心のコミュニケーションをとるために、言葉によるコミュニケーションは重要な一つの方法なのだと分かった。悠介やミンミンを始めとするこの本の登場人物たちから、外国語教育、そして国語教育とは何のためなのか、今後わたし自身がどう取り組んでいけば良いのか、ヒントをもらった気がする。わたしの心の中に、先入観や思いこみ、偏見といった障害物がない、「まっすぐな地平線」をえがいていくために。